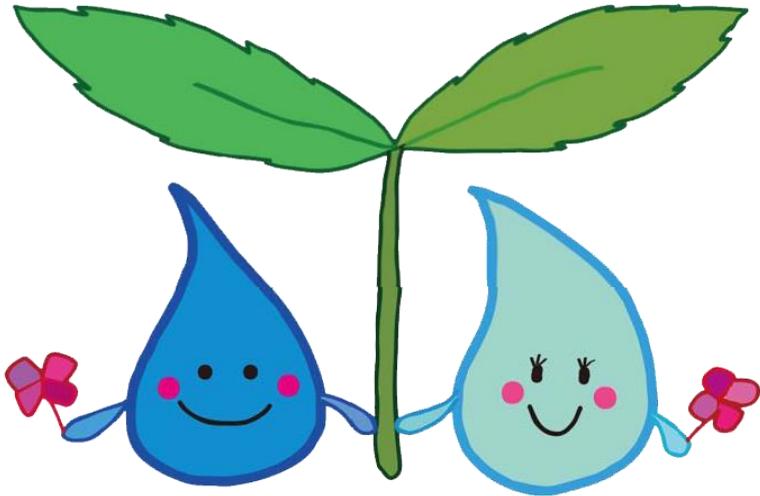


第36回

開成町福祉作文コンクール

入選作文集



みずたまちゃん



社会福祉
法人

開成町社会福祉協議会

福祉作文コンクールは、「ともに生きる福祉社会づくり」をめざし、次代を担う町内在住の児童・生徒を対象に実施し、作文を通して社会連帯を基調とした福祉への理解と関心を深め、福祉活動への主体的参加意識を育成することを目的に行われております。

第36回を迎えた今回は、町内の小・中学校合せて343編の応募がありました。小・中学校別の審査会を経て、優秀賞6編、優良賞4編、佳作10編を決定いたしました。

本作文集は、入選された20編の作文を掲載しております。どの作文も、自らの体験を通じて感じたことや考えたことが作者の言葉で書かれています。この作文集が大勢の皆様目の留まり、思いやり、助けあい、支えあいの気持ちで社会全体に広がっていくことを期待しております。

本コンクールに参加した小・中学生の皆さん、ご指導にあたられた先生方、ご家族の皆様、ご多忙のなか審査していただきました審査員の皆様に、心からお礼申し上げます。また、ご協力いただいた、開成町教育委員会、開成小学校、開成南小学校、文命中学校の皆様には深く感謝申し上げます。

令和6年10月

社会福祉法人開成町社会福祉協議会
神奈川県共同募金会開成町支会

審査にあたられた方々

順不同／敬称略

開成町教育委員会	上村拓也
開成町立文命中学校	松村徹
開成町立開成小学校	宇田晃
開成町立開成南小学校	鳥居厚子
老人クラブ連合会	小川周作
身体障がい者福祉協会	遠藤伸一
地域支援センターひまわり	鈴木洸太
民生委員児童委員協議会	小田猛
開成町福祉介護課	中戸川進二
一般公募	林香

第36 回開成町福祉作文コンクール入選作文集

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

笑顔が つながる 「子ども食堂」

開成南6年

清田 きよた

愛海 まなみ

∴ 1

◆共同募金会開成町支会長賞◆

静かな おしゃべりさん達

開成南6年

中村 なかむら

天祢 あまね

∴ 2

◆開成町教育長賞◆

福祉サービスの大切さ

開成南6年

北野 きたの

碧唯 あおい

∴ 3

優良賞

祖父の介護の経験から考えたこと

開成南6年

川島 かわしま

舞依 まい

∴ 4

みんなの笑顔を守るために

開成6年

齋藤 さいとう

煌日 きらひ

∴ 5

佳作

みんなが住みやすくなるためには

開成南4年

小宮山成実
こみやまなるみ

∴6

人にやさしい車いす

開成5年

ひろなか
弘中 壮亮
そうすけ

∴7

小さな工夫が大きな助けに

開成5年

しいの
椎野 夢乃
ゆの

∴8

福祉って？ ～手話と出会って～

開成南6年

おおたに
大谷 航基
こうき

∴9

福祉がある中で

開成6年

おそのいりと
小園井莉斗

∴10

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

支援のカタチ

文 命3年

井上 いのうえ
心結 こころ

∴
11

◆共同募金会開成町支会長賞◆

「私の母」

文 命3年

三鬼 みき
桃華 ももか

∴
13

◆開成町教育長賞◆

障がいをこえて

文 命3年

中野 なかの
蘭 らん

∴
15

優良賞

繋がる系、広がる道

文 命3年

平林 ひらばやし
紗季 せき

∴
17

祖父と祖母の介護生活

文 命3年

木村 きむら
冴人 さえと

∴
19

佳作

相手をいちばんに思いやって	文	命3年	中島 <small>なかじま</small>	悠希 <small>ゆき</small>	∴	21
「知ることの大切さ」	文	命3年	山下 <small>やました</small>	柚羽 <small>ゆずは</small>	∴	23
認知症と地域	文	命3年	井上 <small>いのうえ</small>	碧乃 <small>たまの</small>	∴	25
福祉サービスのありがたみ	文	命3年	久保奈津実 <small>くぼなつみ</small>		∴	27
後悔を糧に	文	命3年	遠藤 <small>えんどう</small>	朱音 <small>あかね</small>	∴	29

■ 作文の中、「障害」という言葉を「人や人の状態」を表す場合は、「障がい」と表記しています。

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

笑顔が つながる 「子ども食堂」

開成南小学校 6年

清田 きよた
愛海 まなみ

最近テレビや身近なところで「子ども食堂」という言葉をよく聞く。今年の夏、ついに私の家の近くにも子ども食堂がやってきた。

子ども食堂が行われた下島自治会館は、太鼓や阿波おどり、自治会の行事でも時々使うとても身近な場所だ。私が一年生の時までは、福祉部と子ども会と一緒に七夕イベントをやっていた。地域のお年寄りとも子ども達と一緒に七夕飾りを作り、福祉部の方が作ってくれたカレーをみんなで食べるイベントだった。

コロナで一緒に食べる機会はなくなってしまうが、夏休みに家で留守番をしている子どもがいることを知った福祉部の方が、「夏休み宿題お助け会

&子ども食堂」を企画してくれた。涼しい自治会館に集まって、宿題をやって、カレーを食べて遊べるそんな一日。内容にひかれて私も参加してみた。

当日、一階では、勉強スペースと書道や手芸のブースが設けられ、福祉部の方や大学生が先生になって教えてくれた。二階からはカレーのいい匂いがしていた。私は書道を教えてもらい、最後は納得のいく字が書けた。

お昼には熱々のカレーを友達と一緒に食べた。カレーをよそってくれた福祉部の方とも自然と会話が弾み、お互い笑顔になった。午後にはカールレットが登場し、おじさん達も増えた。子どもも大人も本気になって試合を楽しんだ。

私も長期休みには一人でお昼を食べることが多い。子ども食堂で温かい食事を一緒に食べる楽しさを実感した。

コロナ禍に比べて地域のふれあいが増えたが、食事や遊びを通しての交流がもっと増えれば、子どももお年寄りも孤立することなく、みんなが笑顔になると思う。次は、一人でお昼を食べている友達も誘って、笑顔をつなげていきたいと思う。

優秀賞

◆共同募金会開成町支会長賞◆

静かなおしゃべりさん達

開成南小学校 6年

中村 なかむら
天称 あまね

みなさんは想像できるだろうか。音のない世界に
いることを。不安になったりしないだろうか。静か
な世界と音のある二つの世界は別のものだと思っ
ていないだろうか。

私は去年の夏ごろ、母と町の手話サークルを体験
し、友達がいたからという気軽な気持ちで入会した。
そこには色々な人がいた。私のように音が聞こえて
しゃべることができる人(健聴者)、補聴器をつけて
少しだけ聞こえる人、生まれたときから聞こえない
人、だんだんと聞こえなくなってしまう人など、
「聞こえない」にも様々な形がある。私は生まれた
ときからみんな耳が聞こえないのだと思っていた
からおどろいた。最初は手話ができなかつたし、話
しかける勇氣もなかつたけれど、ある日、一人のろ
う者が私に話しかけてくれた。周りの大人が通訳を

してくれて少しだけ話すことができたのがうれし
くて、どんどん手話で話すことが好きになった。そ
して使える手話も増え、仲良くなることができた頃、
質問をした。「聞こえなくて困ることある？」と聞く
と、「特にないよ。慣れてるから。」と言われ私はび
っくりした。あるテレビで健聴者がろう者に私と同
じ質問をしていた。するとろう者は「じゃあ、あな
たは今赤信号の横断歩道を待っていると思像して
みて。もし背中に翼が生えていたら簡単に飛びこす
ことができるけど、今はない。翼がないとあなたは
不便？」と聞き返した。私は、不便じゃないけどあ
つたらいいなと思った。そしてはっとした。同じな
んだと。
ろう者は静かな世界にいるため静かな人だと思
っていたけど、明るくて優しく「おしゃべり」だ
った。耳が聞こえないからかわいそう、世界が別と
いう訳ではなく、同じ人で、みんな同じ世界に住ん
でいるのだからお互いに助け合って生活していき
たいと思っている。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

福祉サービスの大切さ

開成南小学校 6年

北野 きたの 碧唯 あおい

私のおじいちゃんは難病と呼ばれている病気でした。そして介護の際には福祉サービスを利用していました。

介護は大変とよく聞きますが、実際は想像よりもおばあちゃんやお母さんなどとても大変そうで、辛そうでした。一人では歩くことのできないおじいちゃんを、ベッドから起こし、歩行器のとなりで支えながらトイレやリビングに移動したり、食事を手伝ったりと生活全てに支えが必要でした。そしてそんな時におばあちゃんなどの負担を減らし、支えてくれているのが、ヘルパーさんや介護士さん・看護師さん達です。朝や夜はヘルパーさんに来てもらい、マッサージの人や入浴を手伝う人など、おばあちゃん一人では大変なことをヘルパーさん達は手伝ってくれていました。私もよくヘルパーさん達が何を

やっているのか見ていましたが、やはりヘルパーさん達やこのような福祉サービスは、とても大切だと私は思います。家族だけで在宅介護をしていくのはとても難しく、専門的な知識や技術がないと出来ない事もたくさんあります。なので病気の人や、介護の必要な人も、その人の家族も支えてくれるヘルパーさん達や福祉サービスは大切で、とても必要とされているのだと私は思います。

ヘルパーさんや福祉サービスのおかげで私達家族はとても助かりました。おじいちゃんもとても助かったと思います。このような福祉サービスをもっとたくさんの人に知ってもらって、私達家族のように少しでも負担を減らしてほしいと思います。また、福祉サービスという選択肢を知り、利用することで気持ちが増える人が増えると良いなと思います。

優良賞

祖父の介護の経験から考えたこと

開成南小学校 6年

川島 舞依かわしま まい

私の祖父は、十年前に脳梗塞をわずらいました。治療後の祖父がどのような介護を受けていたのか、祖母に聞いてみました。

祖父は、手術をしたあと一命をとりとめました。が、後遺症が残ってしまったため、リハビリを受けることになりました。退院する頃、左手に不自由が残っていて、要支援の判定を受けました。後遺症のリハビリを始め、少しでも左手の動きが戻るように頑張っていました。私が遊びに行くと、リハビリの動きをしたり指先の訓練をしていたことを覚えていません。祖母がリハビリへ送り迎えをしていましたが、だんだんそれが難しくなってきました。なぜなら、祖母の具合が悪い時でも、また、北海道暮らしなので大雪が降っても、祖父を送り迎えしなくてはいけなかったからです。そんな時に、リハビリ病院の送

迎バスや介護タクシーの利用を知りました。祖父がサポートを得て一人でリハビリに通えるようになり、祖母の負担が減りました。

リハビリに順調に通っていた矢先に、祖父が、家の玄関で転んで背骨を圧迫骨折してしまいました。このことがあって「地域包括支援センター」にどうしたら安全に過ごせるかを相談しました。その結果、おふろやトイレなど、家に何か所も手すりをつけることにしました。家の中で転ばないように歩行器を借りました。これらは、祖父が「自分のことを自分でする」ための大事なサポートでした。私は、このことから、高齢者でも病気で体が不自由になった人も、助けをかりながら、できるだけ自分で生活することの大切さを知りました。

人は皆、最後には高齢者になります。福祉のおかげで自分らしく生きていけることが今はわかりました。自分らしく生きたいという願いが今の福祉をつくったのだと思います。

優良賞

みんなの笑顔を守るために

開成小学校

6年

齋藤 煌日さいとう きらひ

ぼくのいここには、生まれた時から両耳がきこえない男の子がいます。先天性難聴という病名だそうです。新生児の千人に一人の割合で両耳に難聴ようがあるといわれ、生まれてすぐの検査で見えることもできるそうです。ぼくのいここも、生まれてすぐにその病気が発見されました。

その後は、何度も手術をしたり、話す力をつける訓練をして、ほちよう器やサポートをして下さる人の力を借りながら、今は会話を楽しんで元気に笑顔で過ごしています。

けれど、ほちよう器を外してしまうと、一しゅんにして今の世界が変わってしまうような、ぼくの目の前にいここがいるのに何も伝わらない、伝えられなくなってしまう。ぼくだけが声を出して、いここが今、何を思っているのか、何を伝えたいの

か、まったくわからなくなってしまいました。すごくこわくて、どこかに一人で取り残されてしまったような空間になりました。その時、学校の授業でも習った手話の事を思い出しました。耳がきこえない人にとつて、とても大事な役割だったのだと改めて感じたしゅん間でした。ぼくは、いここのお母さんに少しだけ手話を教えてもらい、いここと手話で会話をしました。すごく難しかったけれど、いこの笑顔が見られて、手話で伝えられることが出来てとてもうれしかったです。

そのような体験を通して、ぼくは、まだまだ福祉に関して勉強不足ではあるけれど、今ぼくに出来ることは何か、しっかり考えて今後とも過ごしていきたいです。

だれもが住みやすく、幸せに暮らせるような、あたたかい社会であるために、一人一人が周りの人にも目を向けて、思いやりの心をもって、出来る限りの力と勇気で、少しでも行動に移すことが大切だと思えました。

みんなが住みやすくなるためには

開成南小学校 4年

こみやま
小宮山 なるみ
成実

私は、夏休みにジュニアサマースクールで行われた、介ご体けん教室にさんかしました。介ご体けん教室は、介ごしせつの開成町「サウスマーク」で行いました。

サウスマークの部屋には、安心して住みやすい工夫が三つありました。一つめは、手すりがたくさんあることです。歩いたり、立つ時の支えになります。二つめは、車いすの人も、手のとどきやすい位置に、せつびがあることです。バッグをかけたリ、たなに手がとどかないとふべんなので、ひくい位置にあります。三つめは、車いすの人も動きやすいように、スペースを広くとっていることです。

私が一番おどろいたのは、身体が不自由な人が、お風呂に入れることでした。「バスチェア」という入浴用車イスで、お風呂をまたげない人でもすわった

まま入浴できました。お風呂が入れない人も、入れないからあきらめるのではなく、入れるようにするという工夫がとてもすばらしいと思いました。

私は、介ご体けん教室を通して、お年よりや身体が不自由な人が、どのようにすごしているのかを知ることができました。私にも役にたてることはないかと考えました。町の中で私にできることは、電車で席をゆずったり、ゆかに落としてしまった物を拾うなど、こまっっている時に助けることがうかびました。でもそれは、身体が不自由な人だけではなく、私のまわりにいる友達や大人、家族など、全ての人にあたると思います。まだ小さな支えですが、少しでも役にたてたら、「共に生きる福祉社会」に近づけると思います。

佳作

人にやさしい車いす

開成小学校

5年

ひろなか
弘中 壮亮
そうすけ

ぼくは、四年生のころに福祉の学習で車いすにのる体験をしました。そこで車いすを自走する楽しさや、かい助者の友達と関わる楽しさを感じて車いすについて調べてみました。

車いすの原型は江戸時代の絵に描かれていて、箱に車輪のついた物でした。その後、第二次世界大戦で背髄損傷になった人のために、背中にクッションが付いていて床ずれをふせいでくれる車いすが作られました。重たくて移動範囲は広くありませんでした。それから、日本は一九六四年のパラリンピックで海外選手が乗っていた車いすに衝撃を受け、現代のスタンダードタイプに近い物を製造しました。そして、利用者の体形にあったサイズが選べるモジュールタイプや、ぎ位をたもつのが困難な方に背もたれやぎ面を傾けられるリクライニング・テ

イルトタイプ、レバーで車輪を動かせる電動タイプ等へ発展していきました。これらを調べて、車いすはユーザーの状態によりそって作られてきたのだと考えました。

そこで、そんな車いすはユーザーにとってどんな物かを知るために弟とデイサービスの体験に行ってみました。そこでは歌を歌ったり、体操をしたりしていました。体操の時にぼくたちが元気に動いて遊ぶと高齢者さんたちは明るく笑顔で反応してくれました。このことから、デイサービスは外に出て人と関わり、心や体の健康をたもつためにあると考えて、車いすがないとせつに來られない人にとって、車いすはとても大切だと思いました。

このように、どんな人でも外出して人と関わり、心を明るくしてくれる車いすはとてもすごいと思いました。ですが、車いすや障害を理解しない人の言葉や町中の障害物でそれは妨げられてしまします。だからぼくは通行のじやまになる物を気にかかけたり、相手の気持ちを考えて発言したりしようと思います。

佳作

小さな工夫が大きな助けに

開成小学校

5年

椎野^{しいの}夢乃^{ゆの}

私には、来年で九十五歳をむかえるひいおばあちゃんがあります。いつも元気で、こしも曲がっていなくて、ボールをけつたり一緒に遊んでくれる元気なひいおばあちゃんです。

そんなひいおばあちゃんが、ある日、こしが痛くなってしまい、歩くことがむずかしくなっていました。たと聞き、心配になって会いに行くと、こしが痛くて足が上げられず、つえを使ってゆっくりゆっくりと歩いていました。いつもの様子と全くちがった姿を見てとても心配になりました。ひいおばあちゃんの家は昔の家の造りで段差がたくさんあったり階段の一段一段が高くて、手すりもないので、とてもあぶないです。なので私のお父さんが大工なので、トイレと、裏の勝手口に手すりをつけてあげました。すると今までより楽にトイレに行けるようになり、

段々と前のように歩けるようになってきました。あとで話を聞いてみたら、トイレに行くことも大変で、トイレに行かないように水分をとらないようにしていたようで、体調もあまりよくなかったそうです。私たちがができることでも歳を重ねるとだんだんとむずかしくなってくるのが分かりました。そういう時、家の中でも、こうした少しの工夫が助けになり、大切なことなんだと感じました。このことがあってから、ひいおばあちゃんの家に行くたび、台所や茶の間の段差、お風呂の扉がガラスなことが気になります。転んでしまいかを高齢者の事故が多いので、すぐあぶないと思いました。なのでそういったきけんな所をもつと見つけてお家を住みやすくするために、私とお父さんと、たくさん工夫をしていくといいなと思いました。そして、いつまでも元気で、やさしいひいおばあちゃんであってほしいです。

佳作

福祉って？ ～手話と出会って～

開成南小学校 6年

大谷 航基 おわたに こうき

ぼくが思う「しようがい者」は「だれかの助けが必要な人」、「福祉」は、「そんな人達の助けをする活動」だ。でもぼくの周りには助けを求めている人もいないし、求められた事もない。そうつぶやくと母から地域の手話サークルの事を教えてもらった。そこでぼくは実際にサークルの活動の見学に行ってみる事にした。

そこには「ろう」と名乗る全く聞こえない人や「難聴の人」がいた。はじめはその人たちのことが少しこわく感じどうしたらいいか分からなかった。でもみんなが、ぼくに必死になにかを言ってくれて、半分以上はなんて言ってくれたか分からなかったけど、「ぼくがもっと手話が分かればよかったのに。もっと手話を学び話せるようになりたい。」と思った。その日ぼく一人のためにたくさんの手話を教えて

くれた。よく見ると手話は手の形や動きで色んな言葉であらわしていた。テニスはうつつふりをする。野球は左手でボールを作り右手でうつつふりをする。サッカーも左手でボールを作り右手の指を足に見たててけるふりをするなど、ジェスチャーからできていた。分からなくてもそれっぽくすれば伝わると知り、少し楽しくなってきた。ぼくがもっと手話を覚えれば話す事がふえる。「助けが必要」とか「助けをする活動」とかではないかもしれないと思うようになった。

ぼくは今回出会った人ともっと話してみたい。だからもっと手話ができるようになりたい。外国の人と話す時だって英語が必要だ。でもそんなに話せなくてもジェスチャーでなんとなく伝わった。手話も英語も同じなのかもしれない。「しようがい者」だからと考えるんじゃないかと「助ける側」になるんじゃないかと、ぼくのやり方で関わっていききたい。

佳作

福祉がある中で

開成小学校

6年

おそいの
小園井 りと
莉斗

ぼくが電車に乗っていたら、立ってあるくことができず、車いすを使われている方を見かけました。そのとき、ぼくはこう思いました。

(何か手伝えることはありますか?)と、声をかけようかな?)

そう思ったのに、声をかけようか迷っただけで、何も手伝えませんでした。

それから一か月くらいたった日に、友達と電車に乗ってあそびに行ったら、また車いすに乗られている方がいました。友達と、

「声をかける?どうする?」

などと言っている間に、一人の男性の方が、

「大丈夫ですか?何か手伝いましょうか?」

と声をかけていました。車いすに乗られていた方は笑顔で、

「ありがとう」

と、男性の方にかんしゃしていました。ぼくは、その男性の方みたいになりたいと思いました。

電車をおりて、目的地に向かってしていると、白杖をもった方を見かけました。ぼくは、白杖の意味を知っていたので、

「大丈夫ですか?何か手伝いますよ。」

と、迷わず声をかけました。すると、

「ありがとう、じゃあ荷物をもつてくれるかしら」と、かんしゃされました。荷物をもつてみると重く、持つのが大変でした。

(目が見えないのに、こんな荷物を白杖を持ちながら持つっていったんだ。)

そう思いました。

自分の体が自由に動かない方や、目が見えない方がいる中で、今の自分にできるはんいの声かけと手伝いをしていこうと思いました。

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

支援のカタチ

文命中学校

3年

井上

心結

いのうえ こころ

皆さんは人からの親切な行動を素直に受け取れなかった事はあるだろうか。せっかくの善意でしてくれた行動に「ありがとう」の気持ちと、ほんの少しの「モヤツ」とした感情が生まれたことが私にはある。その瞬間、そんな自分が嫌だった。それは学校の下駄箱での話だ。空いている下駄箱が一番上しかなく、少し高い位置だったがそこに私は靴を入れた。帰りに友人が「取ってあげるね」と一番上に入った私の靴を取ってくれた。私は、「ありがとう」と言葉を返した。ただ友人は自然に親切な行動をしてくれただけ。それなのに私は、少しだけ「モヤツ」としてしまった。何でそのような感情を抱いてしまったのだろう。

私は小学校の頃から低身長でずっと病院に通っている。毎月の注射や血液検査・レントゲン・毎日の服薬。慣れたけどやっぱり大変だったし嫌だった。身長が低いことで何をするにも一番前、目立つことが苦手な私はそれがとても苦痛だった。話を戻すと靴は自分で入れたのだから自分で取れるのだ。「自分で取れるのに。」今までの嫌だった経験が積み重なり、私の心の中ではせっかくの友人の優しさが「小さい子扱いされた」という思いに変換されてしまった。それがまさに「モヤツ」の発信源だった。友人は何も悪くない。

そんな話を母に相談したところ、母はまさに私と逆の立場で行動してしまい、反省しているという話をしてくれた。母の職場には、車椅子の方がいらっしやるそうだ。母はその方が職場の出入りをする時に、扉を開けて待っていたことがあった。その時は「ありがとう」と言われ、普通に過ごしていたが、よく観察してみるとその方は何度も出入りをしており、扉の周りにいた他の方は特に補助をすることはなかった。そこで母は「余計なことをしてしまっただ」と思ったそうだ。周りの方は決して不親切ではなく、あえてお手伝いをしていないのだろうと母は

気づいた。母は続けて職場での話をしてくれた。避難訓練の際その方は、「後で避難場所で合流しようね」とみんなに声を掛けられていた。実際の災害時、周りに人がいるとは限らない。その時のため、まずは一人で避難できるようにという意図だった。そして職場の方はこう続けた。「本当に困った時は皆で担いで避難する準備はできているから」と。母はこれが本当の支援なんだと思ったそうだ。私はこの話を聞いて、いざという時に手を貸してもらえる安心感という土壌がある上で、本人の力で何でも行動できるように良い意味で「手を離すこと」が来ていると感じた。必要以上の支援はされる側にとつては負担になってしまうこと・本来できることを妨げてしまうこともある。扉を開けることも一つの支援だが、もう一步踏み込んで、心地良く居やすい環境と共に造ることも大事な支援だと思う。まずは躊躇なく声掛けをし、支援することはとても大切なことだ。その次は、その人を良く知りその人にあった支援とは何かを考えて行動することが必要なのではないだろうか。そう考えると支援とは、特別なことではなく人と人とのコミュニケーションそのものではないかと思う。母の職場では、日頃から十分にコミ

ュニケーションが取れているからこそ良い関係性が築けたのだろう。私も友人が靴を取ってくれた時に「ありがとう！でも私、届くんだよね」と少しでも軽く返せば良かった。私の「モヤッ」はコミュニケーションを取ることで簡単に解消できたはずだ。障がいのあるなしに関わらず、相手を良く知り、自分のことも知ってもらおう。その積み重ねが支援の大切な一步になる。人の数だけ支援のカチがある。日々のコミュニケーションの中で、私はこの問いかけを忘れずにしていきたい。

「あなたのカチはどんなカチチ？」

優秀賞

◆共同募金会開成町支会長賞◆

「私の母」

文命中学校

3年

三鬼 みき 桃華 ももか

私の母は目が不自由である。小学生の頃から母の目の不自由さを身近に感じて育った私は、家族の中で福祉の重要性を深く理解する機会に恵まれた。母が障がいを持ちながらも日常生活を送れるのは、母自身の努力だけでなく、周囲の支えや福祉制度の恩恵があつてこそであると強く感じている。

母が視力を失ったのは、私が小学生の頃だった。最初是一部の視力が低下し、その後、徐々に失明へと進行していった。この状況は家族にとつて大きな試練であつたが、母は決して自分を諦めず、私たち家族に対しても決して弱音を吐かなかつた。しかし、目が見えなくなるといふ事実に向き合う中で、私たち家族はさまざまな困難に直面することになった。日常生活での小さなことが、大きな障害になることを痛感した。例えば、母が料理をする際、見えな

い中で刃物を使用したり、火加減を調整するのは危険を伴う。家の中を移動する際にも、家具にぶつかったり、足元にある物につまずいたりすることが頻繁にあつた。私たち家族は、母を支えるためにできる限りのサポートを提供してきたが、それだけでは十分ではなかつた。そんな中で、福祉制度が母と私たち家族にとつて重要な助けとなつた。まず、自立支援医療費助成は、母が通院している医療費を負担してくれる。次にサングラスと白杖を買う際の補助金などが母だけでなく私たち家族にとつても助けとなつた。さらに、家族としても、家の中の環境をどのように整えるべきか、母が自立して生活するために必要なサポートは何かを具体的に理解することができた。例えば、家の中の段差をなくす、明るさを調整するための照明を取り付ける。また、音声案内がついた電子機器を導入するなど、小さな工夫が母の生活の質を大きく向上させた。

母はお米を炊いたり、洗濯物を畳んだりと自分のスキルを活かした家事を行つたりしている。母は、自分の障がいを見つめ、悲観するのではなく、逆にそれを新たな挑戦と捉え、福祉の力を借りながら前向きに生きていく道を選んだのである。

この経験を通じて、私たち家族は、福祉が単なる助け舟であるだけでなく、個人の尊厳を守り、自己実現を支えるための重要な役割を果たしていることを実感した。

母のように視覚障がいを持つ人々が、自立した生活を送れるようにするためには、福祉制度の充実とそれを活用する意識が不可欠であると感じる。私自身も母を通じて得た経験を他の人々に伝えることで、福祉の重要性を広めていきたいと考えている。障がい者が抱える困難は、決してその一人一人で解決できるものではなく、社会全体で支えるべき問題である。そして、その支えがしっかりとしたものであるほど、障がいを持つ人々はより豊かで充実した人生を送ることができるのだ。

福祉の力によって、母は目が不自由でありながらも、多くの人々と同じように自立した生活を送っている。その姿は、私にとって誇りであり、また福祉の大切さを教えてくれるものだ。今後も、母を支えるだけでなく、社会の中で福祉の重要性を伝え続けていきたいと思う。

優秀賞

◆開成町教育長賞◆

障がいをこえて

文命中学校

3年

なかの
野 蘭

皆さんの周りには、障がいを抱えている人はいま
すか。私の祖父は、生まれながらに右耳が聞こえま
せん。その時は、まだ左耳が聞こえていたので、会
話に支障は出ませんでした。ですが、祖父は一昨年
に交通事故に遭い、左耳までも聞こえづらくなっ
てしまいました。そのため、祖父と話す時はかすかに
聞こえる左耳に向かって大きく、高い声で話さなけ
れば、私の声は届きません。

祖父は人混みに行くのが苦手と言っていました。
なぜなら、家族の声聞こえなくなり、聞きとるこ
とに集中するため、凄く疲れるそうです。なので、
犬の世話をしたり、植木の手入れをするような、一
人で過ごすことが好きと言っていました。それを聞
いて、少し悲しくなりました。昔の祖父は、今より
元気で明るく、社交的な性格でした。しかし、耳が

聞こえづらい今は、人との関わりが薄れていってし
まい、遠慮しがちな性格になってしまったからです。
「今年の新年会に親族で集まりました。急に祖父が、
「もういい。」

と言って席を外してしまったことがあります。
私は、何があつたんだろうと思いい、母に聞いてみる
と、

「みんなが話している途中に、おじいちゃんがその
話題と関係ないことを急に言い出して、それを笑わ
れてしまったから、悲しくなって席を外しちゃった
んだよ。」

と教えてくれました。そんな祖父を心配していると、
母が祖父の元に行き、優しく声をかけていました。
母の思いやりある行動に心を動かされ、それと同時
に何も出来なかった私の無力さを思い知らされま
した。

祖父のように、聞こえにくい状況の中で話を聞き
取ろうとすると、聞き取ることに多くの注意を向け
るため、考えながら聞いたり、話を正しく理解でき
なくなってしまうことがあります。聴覚障がいのあ
る人々は、入ってくる情報が限られている上に、途
切れ途切れの情報、自分なりに解釈することにな

るため、大きな勘違いをしてしまうことがあるそうです。また、理解することの難しさから、不満やストレスを抱えたり、わからないことが日常的になったりすると、自信をもって発言や行動できなくなることもあるようです。

今、社会全体では、聴覚障がいの人々が社会参加しやすくなるよう支援されています。例えば、公共の場所や行政機関、医療機関などで手話通訳者を所属させることで、耳の聞こえない人とのコミュニケーションをしやすくなる取り組みなどです。

聴覚障がいの方に限らず、さまざまな障がいを抱える人々を理解し、尊重することが大切だと、私は思います。そのために、障がいを抱える人と接する際には、その人の状況や困難を理解し、差別や偏見を持たずに接することや、障がいについての情報を学び、知識を深めることが必要です。それが、障がいをこえて誰もが心を通じあえる、そんな社会になるための重要な鍵となるでしょう。

優良賞

繋がる糸、広がる道

文命中学校

3年

平林 ひらばやし
紗季 さき

手話。手で話す。それは私の人生を大きく変えた。ある日、バス停でバスを待っていると、手話で話しかけられた。私は何を言っているのか全く分からず、ただ固まってしまった。その後、一瞬悲しそうな顔をして、「駅までの道を教えてくれ。」と書いたメモを見せてくれた。私もメモに書いて返事をしたが、いつまでもその悲しそうな顔を忘れられなかった。

そして、私は手話の勉強を始めた。動きや、手の向きが少しでも違っていると、全く違う意味になってしまい想像よりも難しく苦戦した。だが、普段喋っているときにも手話を入れてみたり、インターネットや本でひたすらに勉強を続けたりと、自分なりの努力をした。手話は耳の聞こえない障がい者と私を繋ぐ

糸だと思った。私はその糸を大切に大切に繋ぐように勉強を続けた。

ある日、私が手話の勉強をしていると知った父は、おばあちゃんが入院しているホスピスという終末期患者の痛みや症状の緩和に焦点をあてた休息の場に連れて行ってくれた。私は死期の近い方にふれあう機会がなく胸が張り裂けそうな思いをした。同時に、少し怖かった。だが、その雰囲気はとても優しく、穏やかだった。

「さきちゃんて言うの、可愛い名前ね。」

「お見舞いに来たの、優しいわね。」

優しい言葉をたくさんかけてくれた。私は複雑な感情になって、涙が出そうだった。必死にこらえてたくさんお話をした。とても、大切な時間を過ごしたと深く思った。その後、手話以外の福祉にも興味をもつことが出来た。点字やバリアフリー、たくさん障がい者と繋がれる糸を作ろうと張り切っていた。数か月後、また父にお願いし、ホスピスに連れて行ってもらうことになった。私は前とは違う、わくわくした気持ちで入った。しかし、待っていたのは絶望だった。前に明るく話しかけてくれた優しいおばあさんが亡くなってしまったらしい。悲しかった

た。悲しくて仕方なかった。あの優しき、明るさは私の太陽だった。その日は、上手に話すことが出来なかった。私は、家に帰って目が開かなくなるほど泣いた。なんでだろう、どうしてあんなに優しい人がいなくなってしまうんだろう。そう考えてはすべてが恨めしく思った。すぐに気持ちを切り替えることは出来なかったが、ふとおばあさんに言われた言葉を思い出した。

「さきちゃんはきつと優しくて明るい子になるわ。」その言葉を胸にしまい、深呼吸をした。そこから私はおばあさんの事で一度も泣いていない。

次の日から私はおばあさんのように明るく太陽のような存在を目指した。今でも思い出すと悲しくなるが、それ以上におばあさんにもらったものを大切にしようという気持ちが、自分の中では大きかった。さらに、前よりも手話への意欲が高まった。受験生ということもあり、勉強に追われていたが、それでも一日一時間は手話の勉強をする時間を取るよう努力した。そして最近、一人で歩いているときにお兄さんに手話で話しかけられた。私は手話で答えることができた。ゆっくりになってしまったが、お兄さんは相づちを打ちながら読み取ってくれた。

左手の甲を上向きにし、右手は小指側を下にする、そして左手の甲の真ん中あたりに垂直に下ろす。小指が当たったら上にあげる。意味は「ありがとう」そんな感謝の気持ち、相手の笑顔に私はおもわず笑みがこぼれた。

優良賞

祖父と祖母の介護生活

文命中学校

3年

木村 冨人
きむら さえと

僕の祖母は脳の珍しい病気で亡くなりました。この病気は今現在これといった治療方法や特効薬がなく、風邪症状が出たら風邪薬をもらって、肺炎を起せば肺炎の治療をする……と目先の症状を治すだけでした。またこの病気の特徴として病気の進行が極めて早く、急速に進行する認知症状があります。僕たち家族は根本的な治療はされず、日に日に認知症が進み、体の機能が衰えていく祖母の姿に不安が募りました。そんな僕たちを助けてくれたのが市役所の方やケアマネージャーさん、ヘルパーさんたちでした。

まず病気がわかって最初に起こった体の変化は歩行困難です。自力で歩けるけど歩きづらい、階段が怖いということやケアマネージャーさんの指示のもと市役所に行き、家の廊下と階段と玄関に手す

りを付けるため補助金の申請をしました。僕の家族と祖父は離れて暮らしているので、こういった手続きは七十代後半の祖父が一人でやりましたが、ケアマネージャーさんも市役所の方も親切に丁寧に教えてくれたことを感謝していました。でもホッとする間もなく祖母の病気はあつという間に進行し、すぐに車イスが必要になりました。この時も市役所で車イスのレンタル手続き、車イスでも生活しやすいよう玄関にスロープを付けるための補助金申請をしました。

祖母と二人で暮らし、一番身近でお世話をしてきたこの頃の祖父からは、病気が進行する祖母の姿に悲しんだり不安になっていたりする暇はなく、事務的な手続き、日常の家事、食事の準備片づけ、そこに祖母の生活の介助など全て一人でやらなくてはいけないという使命感のようなものを感じていました。僕たちも週末には祖父母の家に行くようにしていたので、僕の両親は祖母よりも祖父のことを心配するようになっていました。

発症から半年たつ頃には祖父一人での介護は難しくなり、デイサービスとショートステイというサービスの利用を始めました。この頃は要介護三とい

うレベルだったそうです。週に三回から四回、昼間あずかってくれるデイサービスは車イスごと乗り降りできる車で送り迎えしてくれます。週に二回はお風呂にも入れてくれました。祖父にとって最も大変な作業がお風呂に入れることだったので、この入浴サービスはとても助かりました。ちなみに僕の両親と親せきの叔父叔母が子供が使う大きいサイズのビニールプールを買って、リビングにシートを広げてその上にプールを置いてお風呂がわりにして祖母をきれいにしてあげようとしていましたが、大人四人のあまりの手際の悪さは見ていられませんでした。それっきりプールお風呂の出番はありませんでした。

発症から一年もたたないうちに完全に寝たきり状態になり、要介護五のレベルになりました。ここで祖母をとともとも助けてくれたのがヘルパーさんたちです。祖母の場合是一日二回、昼と夜に来てオムツ交換、着替え、歯みがき、必要な時はシート交換や体をふいたりドライシャンプーをしてくれました。オムツ交換は父が足を持ち上げ、母がふいて交換すると二人がかりでなんとか素人でもできましたが、着替えとシート交換はプロの技で素

人には真似できませんでした。文章では書き表せないほどスマートに素早く無駄な動きが一切ありませんでした。そしてヘルパーさんのもう一つの大きな仕事は祖父の話し相手になってくれることです。一日二回でも誰かと会話できることが祖父にとっては楽しく貴重な時間だったようです。

祖母の経験から、介護サービスは介護を必要とする人と同じ位その家族にとっても必要なものだとわかりました。自分たちでやるといふ責任感も大事ですが、制度やプロに頼る重要性を知りました。

佳作

相手をいちばんに思いやって

文命中学校

3年

中島 悠希なかじま ゆき

みなさんは、相手よりも自分を優先して何か言動をとってしまった経験はありませんか。私は何度もありました。それは家族に対してだったり、友達に対してだったり、気を付けているつもりなのに、後悔することが多々あります。少なからずみなさんにもあるのではないのでしょうか。この、「他人よりも自分を優先してしまう言動」が今、いろいろな場面で感じるようになりました。

ある日、私は家族と、夕食を食べるために、洋食店に行きました。その洋食店は、スマートフォンでQRコードを読みとり、注文する必要があるお店でした。私たちはたあいなく注文することができましたが、前の席に座っていたおばあさんは、どこか困ったようにメニューをのぞいていました。その人は一人でお店に来ており、注文の仕方がわからない

め困っている、ということには気づけましたが、私は声をかけることができませんでした。しばらくすると、店員さんがおばあさんに直接注文を承っていました。自分の羞恥心を優先し、目の前にいる困っている人を助けられなかったことに後悔しました。

このことから、誰もが暮らしやすいまちを実現するには、「個人の努力」と「環境の努力」が必要であると考えました。

まず「個人の努力」とは、洋食店での私のとるべきだった言動です。あの時、「注文の仕方を教えましょうか」などと言、声をかけられていけば、おばあさんも素早く注文できたのではないかと思えます。一人の言動で助けられた人がいたら、それは「個人の努力」だと思えます。

そして「環境の努力」とは、洋食店にあたります。

この洋食店に限らず、多くの店はタブレット注文などを導入しています。この注文方法は、店の人件費削減や、効率化を重視しているようですが、機械に慣れている人もそうでない人もいます。後者の人が困るように、これは店に重きを置いてある注文方法ではないかと思えます。

これら二つの努力の片方が欠けていても、誰もが暮らしやすいまちとは言えません。欠けた方を補い合うことも大切だと考えます。

例えば、先程の洋食店です。おばあさんが注文してきたのは、呼びだしボタンがあったからです。私のように声をかけられなかった「個人」がいても、一つの「環境の努力」により、誰もが暮らしやすいまちの実現に近づいていると思います。

また、「個人の努力」が「環境の努力」を補うことでもあります。

何年か前に、ある歩道橋で若い男性がおじいさんのキャリーカートを持ち、助けている姿を見かけたことがあります。その横断歩道橋には、スロープがないため「環境の努力」に欠けているところがありました。そこを男性の「個人の努力」で補い、おじいさんを支えていたのです。「助け合いは大切」という単純な事を改めて気づかされた日でした。

これらのことから、「個人の努力」と「環境の努力」が補い合うことが、誰もが暮らしやすいまちの実現の一番の近道だと考えます。今は高齢化社会で、高齢者の暮らしやすきは、私たち若い世代がつくり上げていくものだと思います。高齢者だけでなく、家

族、友達、先生といった周りの人にも「自分を優先せず、相手を優先し思いやる」心から、「個人の努力」につながると思っています。一つの思いやりの心が積み重なったり、「個人の努力」が自分を支えたりする場面もあると思います。

これからは、少し立ち止まって考えてみます。これは「自分を優先せず、相手を思いやった言動」であるか、と。

佳作

「知ることの大切さ」

文命中学校

3年

山下 柚羽
やました ゆずは

私の祖母は認知症を患っていた。私が幼いころに亡くなってしまったので、はっきりと覚えていない。祖母は、私たちと一緒に住んでいたため、父や母がお世話をしていたこと、私や兄が母と一緒に顔を拭いてあげたことを覚えていいる。とても優しい祖母だったと思う。

私はこれまで、認知症について調べたこともなかった。福祉作文を書くころと思った時、一番最初に頭に浮かんだことは祖母の顔と認知症という言葉だった。身近な人の患っていた病気についてきちんと理解しておきたいという思いから調べてみることにした。

まず、日本の高齢者は年々増加していて、認知症の人は二〇二五年には約七〇万人、約五人に一人になると言われている。認知症とは、いろいろな原

因で脳の細胞が死んでしまったり、働きが悪くなったために様々な障害が起こり生活していくうえで支障が出ている状態だということを知った。一人で生活することが難しくなる。認知症の症状は大きく分けて二つ。中核症状と、周辺症状がある。中核症状は認知症の人の誰にでも現れる症状で、主に記憶障害と呼ばれる物忘れだそうです。周辺症状は、中核症状に関連しながら身体的要因や環境的要因等が関わって現れる気分の落ち込み、興奮、徘徊、妄想などの症状がある。これは、誰にでも現れるものではなく、周りの人のかかわりや環境で良くも悪くもなると知った。認知症を患い、日常生活に支障をきたし周りの人との関係が損なわれることもしばしば起こる。しかし周りの人の理解とちよつとした手助けがあれば、穏やかに住み慣れた地域で暮らしていくことが可能と言われているそうです。

私の祖母のことを、母に聞いてみた。祖母は、認知症となつてから、介護保険サービスを使ってデイサービスに通い、訪問介護を利用し、お世話を手伝ってもらっていたそうです。また、長年開成町で暮らしていた祖母は散歩が好きでよく歩いていてせいか物忘れが始まってからも、よく散歩に行ってい

たそうですが、何回か道が分からなくなって近所の方が家まで連れてきてくれたことがあり、とても助けられたそうです。また、近所には祖母と同じくらいの年の人がいて、外に出ていれば話しかけてくれて、体調はどうか気にかけてもらえていたことがとても嬉しかったと話していた。

認知症のことを調べていたら、認知症サポーターというものがあるのを知った。認知症サポーターとは、認知症について正しく理解し、認知症の人やその家族を見守るのが認知症サポーターだそうです。地域で行っている講座で認知症について勉強することができそうです。開成町の高齢者保険福祉計画・介護保険事業計画に記載されていた、介護が必要になった場合の生活についてのアンケートでは「介護サービスを利用しながら自宅で生活したい」が五十八・三%で最も高く、前年度に比べても増加していた。私の祖母も同じように自分の家で最期まで暮らしたかっと思う。高齢者のこの願いを叶えるためにも、家族だけではなく、地域の人が認知症のことを正しく理解し、共に支え合う社会を作っていくことが大事だと思った。地域の大人に任せるのではなく、子供たちも今から認知症を正しく理解し、

地域の認知症の人やそうではない高齢者の人を少しでも支えられるようにしていくことが必要だと思う。認知症について知ること、今私が出来る事を考えることができ、知ることの大切さを学ぶことができた。認知症サポーターの講座が行われる時には友達と一緒に参加し、さらに理解を深めたいと思う。

佳作

認知症と地域

文命中学校

3年

井上 碧乃
いのうえ たまの

私には、離れて暮らす認知症の祖母がいます。今年はじめ頃発症してしまい、今は病院に入院しています。家族でお見舞いに行ったりしています。

祖母が認知症を発症してからなかなか会えなくなり、会話も電話ですることが減ってしまいました。以前は、祖母から話題をふられて、私が受け答えて会話を弾ませていたけれど、その頃とは違い、黙り込んでしまうことが多くなりました。話をしたくても認知症によって言葉が出てこなかったのです。

また、先日祖母に会いに行ったとき、叔父から祖母が今まで生活でできていたことができなくなっていましたと聞きました。曜日感覚がなくなったり、ご飯が作れなくなったり、薬の量を間違えてしまうようになってしまったそうです。そんな話を聞く中、叔父から「ヘルパーさん」や「デイサービス」

の介護サービスを受けていることを知りました。ヘルパーさんは祖母の家に週に二日来て、食事の準備や簡単なそうじをしてくれます。デイサービスは介護施設に行き、他の利用者と一緒にエクササイズをしたり、お風呂に入ったります。「認知症は家族が支えていかないといけない」と私は勝手に考えていたけれど、このような地域の助けを借りられることを知りませんでした。この助けによって、叔父達や祖母が安心して生活できていることも知りました。私も、祖母がずっと一人で生活していると思っていたので安心しました。

しかし、介護サービスを受けるためには、「要介護認定」が必要になってきます。そのために、いろんな認定調査を受けなければいけません。一番多い原因は認知症で、十六・六パーセントといわれています。また、サービスを受けるためにもお金が必要になってきます。サービスを利用するときの自己負担割合は六十五歳以上の場合が一から三割、四十歳以上六十五歳未満の場合は一割となっており、高齢者の方が負担が大きいです。サービスを受けるからお金を払うのは当たり前かもしれませんが、手軽に充実したサービスを受けられるような社会になってほ

しいと思いました。もし、今より負担する額が多くなったらサービスを受けにくくなってしまうと考えたからです。だけど、祖母が今のサービスを受けられていること、介護をしてくれている人たちの存在に感謝を感じました。そして、その人たちを支えられるようになりたいと思いました。

現在、六十五歳以上の五人に一人が認知症患者となるといわれています。自分や家族もなってしまう可能性があります。なので、世の中にもっといろいろなサービスが広がってほしい、地域でお年寄りや不自由な人たちの生活を助けてあげられるような社会になってほしいと思いました。自分が助けられる立場になってしまいうまで、たくさんの人に手を差し伸べられる人になりたいです。

佳作

福祉サービスのありがたみ

文命中学校

3年

久保 くぼ 奈津実 なつみ

私の祖父は、去年の十二月に亡くなりましたが、福祉サービスのことで、祖父のことを書きたいと思います。

私の祖父は、何年か前に転んでしまつて以来、足が悪くなつてしまい、片足をひきずるような形で歩いていました。そこで、父と母は杖を使うことを勧めました。しかし、祖父は杖などの福祉用具に頼ることで、身体の機能がますます衰えてしまうのではないか、という強い思い込みから杖を使うことを拒否していました。

そのうちに、やはり杖がないためか、歩くのが不安定になっていきました。今までできていた犬の散歩にも行かなくなつてしまい、家の中にいることが増えました。家の中ばかりにいますと、歩く機会が減つてしまい、筋力も落ちてしまつたようで、自分の

部屋にすることが多くなりました。そして、近所の人と顔を合わせる機会も徐々に減つてしまいました。

父と母が心配をして、ケアマネジャーの人に相談し、訪問介護、訪問看護の人達が来てくれるようになりしました。父と母が仕事で家に居ない平日にも来てくださつて、祖父も、父も母も安心して今まで通りの生活を送ることができました。そして、杖を嫌がっていた祖父の意思を尊重してくださり、杖という形ではなく、部屋や廊下、トイレにも手すりを設置したり、玄関の段差には、手すり付きのステップも設置してくれました。それによって祖父は、家の中を歩いたり、庭に出て犬とふれあつたりすることができるようになりました。

祖父が歩けるようになってよかつたと思いましたが、大きく、重い手すりの値段はとても高かつたのではないかと不安に思っていました。そこで、母に聞いてみたところ、介護保険のおかげで、とても安い値段で借りられていることを知りました。今まで介護保険と聞いても何のことか分かりませんでした。したが、こういうところで使われているのかと身近に感じることができました。

ケアマネージャーの人は祖父を気にかけて、頻繁に様子を見に来てくださったたり、訪問介護、看護の人はとても明るく優しく接して下さり、祖父が会話をしている様子が、とても楽しそうに聞こえました。そんな訪問介護、看護の人達に祖父も心を開き、来てくださるのを楽しみに待っているのが伝わってきました。

時々口の悪い祖父に対しても、常に優しく思いやりを持って接して下さったケアマネージャーさんや訪問介護、看護の方々には、家族全員とても感謝していました。特に母は、介護の経験がなく、様々な相談にのっていただき、精神的にとっても救われたと話していました。

普段、自分たちが元気に過ごしている中では、福祉のことについて考えたり、感じることはあまりありませんでした。けれど、祖父のことをたくさんの方が支えてくださっているのを見て、困ったときに助けてくれる福祉のサービスは本当にありがたいものなのだと実感しました。

そのうえで、助けてもらっただけではなく、小さなことでも、困っている人がいたら手を差しのべたり、

助ける側にまわれるよう、意識して過ごしていきたいです。

佳作

後悔を糧に

文命中学校

3年

遠藤 えんどう
朱音 あかね

私の祖母は五年前に亡くなった。癌だった。祖母は、私が小さい頃から闘病生活をしていた。しかしその頃は、車を運転して買い物や習い事に連れて行ってくれたり、一緒に散歩をしたこともあった。母の帰りが遅いと、夕飯の支度もしてくれた。祖母が元気でいることが当たり前だと思っていた。でも、祖母の体は少しずつ弱くなっていった。それにつれて、家の中が変化した。まず、玄関にスロープが付いた。トイレや部屋、玄関には手すりも付いた。祖母は以前より過ごしやすそうだった。そして、家の中ではまだ少し歩けるが、外の移動は全て車椅子になった。もう自分の足で歩くことは難しいのかなど少し悲しい気持ちになった。でも、私は祖母の元気な姿を見たかったので、車椅子を押し、気分転換に散歩に出かけることもあった。寝るときは、ボタン

で高さが調節できるベッドに寝ていた。立ち上がりやすいし、座りやすそうだった。私は、体の不自由な人を支える福祉用具がたくさんあることを知った。そして祖母は、様々な福祉サービスも利用するようになった。福祉サービスとは、身体や精神に障がいのある方や特定の疾患のある方が地域の中で生活を続けていけるよう、支援するサービスのことである。例えば、私の祖母は福祉用具を使い、訪問介護、訪問入浴、訪問看護、医師、薬剤師が家を訪問していた。

次第に、祖母はベッドから動けなくなってしまった。そこからは体が弱っていくスピードがだんだん速くなったと思う。そして食事は、なかなか喉を通らず、パンやおかゆなどの柔らかいものばかり食べていた。もちろん体はどんどん細くなっていった。ついに言葉も発せなくなった。そんな祖母を見てみると、胸が苦しくなった。病気の怖さを知った。そして、何より悲しかった。私は、「何かしてあげたい。何度かそう思ったが、思っただけで行動に移すことはできなかった。正直、祖母にふれるのが怖かったからだ。そのことは今でも後悔している。」

祖母は、家族全員に看取られながら、自宅で最期を迎えた。日本財団が二〇二一年に行った、人生の最期をどこで迎えたいかという全国調査の結果によると、当事者は五八・八パーセントが「自宅」、次いで三三・九パーセントが「医療施設」と回答した。

また、厚生労働省が掲げる在宅医療・介護の推進については、国民の六〇パーセント以上が「自宅での療養」を望んでいることがわかった。私は、なるべく本人の意思を尊重し、本人が過ごしたい場所で療養生活をしたたり、最期を迎えられたらいいと思う。

「福祉」という言葉には、「しあわせ」や「幸福」という意味があり、誰もが幸せに暮らせる社会になるよう、協力しあうことである。病気なんてなければ、みんな健康に生活できるのに。そう思うこともあるが、病気がなくなることはない。世界中には、私の祖母のように病気によって、不自由な生活を送らなければならぬ人もいる。私は、そんな体の不自由な人たちが、今より少しでも過ごしやすい社会を実現していくことが大切だと思う。そのためには、福祉サービスを必要としている人たちが、自分にあったサービスを利用することが大切だと学んだ。

今、私にできることは少ないが、祖母の時のように何も行動することができず、後悔はしたくない。だから今後、私の身近にいる人の体が不自由になつたり、普通の生活をするのが大変になった時は、この経験を生かし、生活を助けてあげたいと思う。

開成町福祉作文コンクール入選作品集(令和6年度版)

令和6年10月発行

発行者 社会福祉法人開成町社会福祉協議会

神奈川県共同募金会開成町支会

〒258-0021 足柄上郡開成町吉田島1043-1 開成町福祉会館内

電話 0465 (82) 5222



この冊子は、神奈川県共同募金会の配分金を活用してつくられました。